

英語教授法を取り入れた 日本語教育の問題点

小田 真幸
玉川大学文学部

1. はじめに

近年の日本語教育の発達に伴い、海外で開発された数多くの言語教授法や教授理論が様々なルートを経て日本に紹介されてきている。それらは主に英語圏で英語教育用に開発されたもので、多くの場合、英文の文献が日本語に翻訳されたもの、または日本人の専門家によってはじめから日本語でまとめられ解説されたもののいずれかを通して日本語教師に紹介されている。本稿では、日本語教師がこれら英語圏の教授法を輸入し日本語教育に取り入れるにあたって生ずる様々な問題点を 1) 輸入の過程で生ずる問題、2) 言語教授のレベルの違いにより生ずる問題の二つのグループに分け、それぞれ実例を交えながら述べる。最後に日本語教師が教室にこれらの教授法を取り入れる際に注意しなければならない点について言及する。

2. 輸入の過程で生ずる問題

教授法の輸入の主なルートの一つとして、英文で書かれた文献の日本語訳が上げられる。下の〈表.1〉は1972年から現在に至る20年間に日本語に翻訳された外国語教授法に関する主な英文の文献の一覧である。

〈表.1.〉 日本語に翻訳された英文の言語教授法の文献 (1972-1992)

原著	訳書
W. Rivers (1968) <u>Teaching Foreign Language Skills</u>	天満 美智子訳(1972) 『外国語習得のスキル』

D .A. Wilkins (1976) <u>Notional Syllabuses</u>	島岡 丘訳注 (1984) 『ノーショナルシラバス：概念を中心とする外国語教授法』
E. Stevick (1976) <u>Memory, Meaning, Method</u>	石田 敏子訳 (1988) 『新しい外国語教育--サイレントウェイのすすめ』
H. Widdowson (1978) <u>Teaching Language as Communication</u>	東後 勝明他訳 (1991) 『コミュニケーションのための言語教育』
K. Johnson & K. Morrow (1981) <u>Communication in the Classroom</u>	小笠原 八重訳 (1984) 『コミュニカティブアプローチと英語教育』
E. Stevick (1982) <u>Teaching and Learning Languages</u>	梅田 巖他訳 (1986) 『外国語の教え方』
S. Krashen & T. Terrell (1983) <u>The Natural Approach</u>	藤森 和子訳 (1986) 『ナチュラルアプローチのすすめ』
D. Larsen-Freeman (1986) <u>Techniques and Principles in Language Teaching</u>	山崎 真穂他訳 (1990) 『外国語の教え方』

2.1.1. 邦訳版の弊害

<表.1.>を見るといくつかの点に気づくことが出来る。まず、原典が日本語に翻訳されるまで、殆どの場合3,4年を要しているということだ。これは、翻訳という作業の複雑さから考えれば仕方ないことだが、読者側が邦訳の出た年を原典の発行年だと解釈してしまい、あたかもその時点での最新の教授理論

の情報を得ているのだと錯覚してしまうことも多い。1991年に「コミュニケーションのための言語教育」(東後 他訳)というタイトルで邦訳の出た Widdowson (1978) の Teaching Language as Communication は原典が出されてから翻訳が完了するまで13年かかっている。その理由はいろいろあると思うが、訳者達は最新の教授理論を紹介するために邦訳を出したのではなく、コミュニケーション教授法の基本となる、いわば「古典」を語学教育に携わる人々に日本語でも読んでもらえるよう翻訳したことは確かだろう。しかし読者側がこの背景を理解していないと次のような問題が生ずる。

2.1.1. 原著者の考えの変化

まず第一に Widdowson 自身の考え方が13年の間に大きく変化していることだ。Widdowson は1983年の論文で彼の1978年の本のタイトルは適当でなかったと述べており、その理由として、"teaching language as communication" (『コミュニケーションとしての言語教育』)では、語学教師が教室内で生徒にコミュニケーション活動を行わせることによって言語を習得させることが究極の目標であると解釈されてしまうことを上げている。Widdowson は言語教育はむしろ言語を習得させることによってコミュニケーション活動が行えるようになることが目標であるべきだとし、"teaching language for communication" (『コミュニケーションのための言語教育』)の方がむしろ彼の考えを表すのに適当であると述べている。従って、1991年以降に邦訳で初めて Widdowson の理論を読んだ人が上の経緯を知らずに1991年の理論として捉えてしまった場合、もはや原著者でさえ不適切と思っている考え方を、最新の教授理論として自分の教室に取り入れようとしてしまうことが考えられる。

2.1.2. 邦訳のタイトルの与える印象

第二に、邦訳のタイトルの問題が上げられる。Widdowson (1978)の邦訳(1991)版のタイトルは前に述べた通り「コミュニケーションのための言語教育」で直訳すると "Teaching language for communication" となり、むしろ原著者の現在の考え方を表している。これは訳者達が Widdowson (1983)の内容を踏まえて気をきかせてタイトルをつけた結果であろうが、中身はあくまでも1978年の理論であるため、かえって読者を混乱させてしまうだけである。邦訳タイトルが内容と一致しない例は他にもある。Stevick (1976) の Memory, Meaning, Method は1988年に『新しい外国語教育--サイレントウェイのすすめ』

(石田 訳)というタイトルで邦訳が出されており、サイレントウェイの入門書のような印象を与えられるが、実際サイレントウェイについて書かれているのは10章中1章のみで、殆どの章は言語と記憶、及び、言語学習の一般論に割かれている。また Community Language Learning 等、他のテクニックもいくつかサイレントウェイと同等に扱われており、タイトルから受ける印象と随分違う内容であることが分かる。これは特に経験の少ない教師にとっては有難くないことである。

2.1.3. 邦訳される時期のずれ

前に、外国語で書かれた原典が日本語に翻訳されて出回るようになるまでにはある程度の時間がかかると述べたが、翻訳される時期に関してはさらに別の問題がある。前出の Stevick (1976) は1988年に邦訳が出ているが、同じ Stevick の1982年の著書 Teaching and Learning Languages は「外国語の教え方」(梅田 他訳)で1986年に邦訳が刊行されている。つまり、邦訳がでる順番が必ずしも原著の発行順と一致しないということである。日本語に翻訳された文献を通じて最新の教授理論の情報収集をしようとするのなら、原著の発行年等にも注意を払っておかなければかえって時代に逆行するような結果になってしまうことも考えられる。

2.1.4. 紹介される教授法、教授理論の偏り

邦訳版を通して新しい教授法や教授理論を取り入れる場合留意しておかなければならないもう一つの点は、必ずしも英語圏で高く評価されているものだけが翻訳されてる訳ではないということである。日本語に翻訳される理由として原著者と訳者が師弟関係であるということも多い。また原著者が国内の学会で講演するのにあわせ、その学者の文献が発行年等に関係なく一時期に集中的に翻訳されることも多い。このような背景があるということについても、日本語教師の一人一人がよく理解しておく必要がある。

2.2. 概念が取り入れられる過程での問題点

外国の教授法や教授理論を取り入れる場合、それまでに日本語に存在していなかった概念に出会うことが多い。外国語の原典の邦訳を読むにしても、日本の専門家によってまとめられた文献を読むにしても、言語教育や応用言語学と

いった分野がわが国では比較的新しいこともあり、新しい専門用語や概念等を日本語でどう表すかということが常に問題になる。1988年に「ロングマン応用言語学用語辞典」(山崎 他訳)が刊行されるまでは、この分野の専門用語辞典等は皆無に等しく、従って、専門用語についても一部を除いて一貫性を欠いていた。〈表.2.〉は最近の文献における専門用語の訳語の一貫性の欠如を示している。どれが最も適切かと判断することは難しい、しかし同じことを示すのにこれだけ多種の訳語が存在すると、特に経験の浅い教師は混乱してしまうだろう。

〈表.2.〉 訳語の一貫性の欠如

(例) "Total Physical Response"

全身反応教授法 (名柄 他 1989, 山崎 他訳 1990)

全身体的反応教授法 (江副 1987)

トータル フィジカル レスポンス (藤森 訳 1986)

トータル フィジカル リスポンス (高見澤 1989)

Total Physical Response (石田 1988)

"Suggestopedia"

暗示式教授法 (名柄 他 1989, 山崎 他訳 1990)

暗示的教授法 (江副 1987)

サジェストピディア (梅田 他訳 1986, 高見澤 1989)

サジェストペディア (田中 1988)

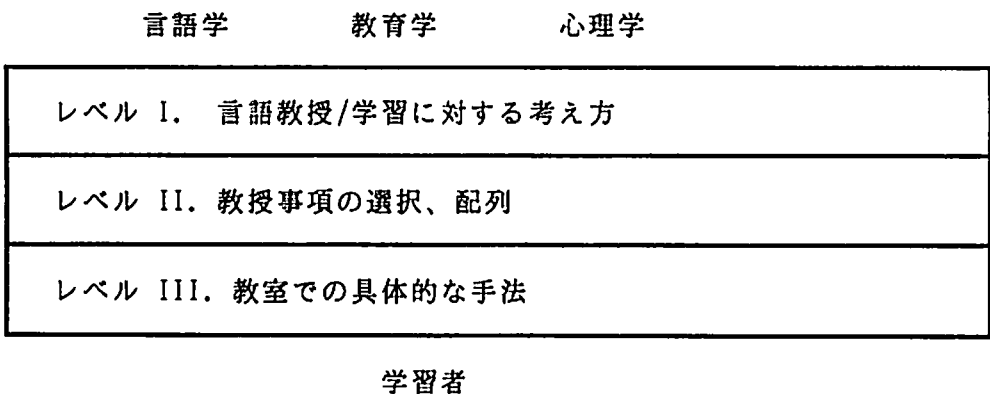
2.3. まとめ

ここまで、海外、特に英語圏の外国語教授法や教授理論が文献によりわが国に入ってくる際に問題となり得る点を、邦訳版の刊行に伴うものと概念を取り入れる過程と関係するものの二つのグループに分け論じてきた。いずれにせよ、海外の教授法や教授理論を取り入れる側、即ち、我々日本語教師は、常に邦訳が刊行された背景、原著の発行年等をよく調べておく必要があると思う。また、専門用語については注意を払っておく必要があるが、どれが正しいというようなことはないので、用語の邦訳に惑わされず、むしろその中身について議論が充分に行えるように努力することが大切である。

3. 言語教授法のレベルの違いにより生ずる問題点

応用言語学や語学教育の分野である程度経験を積んでくると、日本語でいう「教授法」という言葉の指す範囲が大変広いということに気がついてくるだろう。教授法の定義は色々あり専門家の間でもまだまだ議論しつくされてはいない。しかし、一般的には、広義で言う教授法には「アプローチ」、「メソッド」または「デザイン」、そして「プロシージャー」または「テクニック」の三つのレベルが存在しているという考え方が主流である (Anthony 1963, Richards & Rodgers 1986 等)。著者もこれに従い、言語教授を<図.1.>のように、レベルI 言語の教授/学習に対する考え方、レベルII 教授事項の選択と配列、そして、レベルIII 教室での具体的な手法の三段階に分け、それぞれを論じて行くことにする。なお「教授法」という言葉は狭義にはレベルII、即ち「メソッド」を指すのに限定することも多いということも付け加えておく。最後に、誤って違うレベルのものを取り入れようとした時に生ずる問題について言及する。

<図.1.> 言語教授法の段階



3.1. レベルI: 言語の教授/学習に対する考え方

言語教授には、必ずその基となる言語学、教育学、或は心理学の理論が存在する。1950年代に脚光を浴びていたオーディオリンガル教授法は「言語学習は習慣形成である」という行動心理学や構造言語学の理論から派生した考え方を基にしている。1970年代の初期のコミュニカティブ教授法は「言語学習は言語の構造だけではなく意味や機能も学ばなければならない」という考え方が基本になっており、これは、1960年代後半の社会言語学の発達と Communicative

Competence の概念 (Hymes 1967 他)から派生したものである。言語の教授/学習に対する考え方はその基となる言語学等の理論が変化するに従い、微妙に移り変わって行くこともある。コミュニカティブ教授法ではその後、話し手(書き手)と聞き手(読み手)の相互間の「意味の交渉」が唱えられるようになったが、これも社会言語学の領域で談話分析等が盛んに行われるようになった結果であろう。また Communicative Competence の概念も Hymes (1967)のものから表. 3.>のようにさらに細分化されていったため、言語教授/学習に対する考え方、さらに教授法にも多かれ少なかれ影響を与えてきた。

<表.3.> Communicative Competence

Hymes (1967)	
Linguistics Competence	語彙, 文法の能力。
Communicative Competence	状況に応じて言語を適切に使用する能力。
Canale & Swain (1980)	
Grammatical Competence	語彙, 文法の能力。
Sociolinguistic Competence	状況に応じて言語を適切に使用する能力。
Discourse Competence	文脈や前後関係等談話のつながりに関連づけて文を理解したり, 発話したりする能力。
Strategic Competence	コミュニケーションのために自分の持っている他の能力を最大限に活用するための能力。
Bachman (1989)	
LANGUAGE COMPETENCE 言語能力	
Organizational Competence	言語の規則をコントロールする能力。
--Grammatical Competence	語彙, 文法の能力。
--Textual Competence	文章をつなげて談話を形成させる能力。

Pragmatic Competence	言語が実際のどの状況でどのように使われているかを判断する能力。
--Illocutionary Competence	言語機能(function)に関する能力
--Sociolinguistic Competence	状況に応じて言語を適切に使用する能力。
STRATEGIC COMPETENCE	方略能力 コミュニケーションのために自分の持っているか他の能力を最大限に活用するための能力。
PSYCHOPHYSICAL SKILLS	心理, 身体的技能

以上のことから分かるようにこのレベルは「アプローチ」と近い意味を持ち、教授法の基となる言語教授/学習に対する教授法提唱者、或は支持者の信念が示されている段階のことである言ってよいだろう。

3.2. レベルII: 教授事項の選択, 配列

この段階は狭義の「教授法」を指す。言語教授/学習に対する考え方を基に、どのような事項を扱い、それをどのように配列して行くのかが決定されるのもこのレベルである。基本となったレベルIの考え方により、扱う事項が変化してくるのは言うまでもない。最近コースデザインやシラバスデザインと言う言葉をよく耳にするが、それらはこのレベルで行われていることを扱っている。例えば、「言語の機能を重視せよ」と言う考え方があれば、機能シラバスに準じて教授計画が立てられ、どの機能をどの順番で教えるかが決定される。また、言語教授/学習に対する考え方が「ある特定の話題について意見を十分に交換できる能力の養成」等と言うのなら、トピックシラバスが使われるだろう。ところで、「コミュニカティブ教授法」という言葉は現在、レベルIのところで述べたように、いわば「Communicative Competenceの養成が言語教授/学習の基本である」という信念に基づいた教授法の総称として使われている。しかし、Communicative Competenceの定義そのものが多様化してきた現在、様々なコミュニカティブ教授法の間の共通点も少なくなってきたので、もはや、たまたま同じ名前を持っている独立した教授法と考えてよい時期では無いかと思う。

3.3. レベルIII: 教室での具体的な手法

この段階は、学生が教室で実際に何をするのかということ扱い、「テクニック」や「プロシージャ」と呼ばれているものと同様であると考えてよい。オーディオリンガル教授法の Pattern Practice と呼ばれる反復ドリルをはじめ、コミュニケーション教授法でよく用いられる Information-gap Activities, ロールプレイ, さらに Total Physical Response 等も教室で使われる具体的手法である。なお一つの教授法の下でも教室では複数の手法が用いられることがあることはよく理解しておく必要がある。

3.4. レベルの取り違いにより生ずる問題

ここまででは言語教授の三つの段階について述べてきたが、教授法や教授理論を輸入する場合、原著から直接情報を得る場合であっても、議論されている段階を取り違えてしまう人が多い。語学教育の文献には主にレベルI, II を扱った概説的なものとレベルIII中心の特定の手法を紹介したものがある。勿論レベルIIIのことを論ずるにはレベルI, II についての議論を必要であり、どの文献にもこれらは最小限は取り上げられているが、やはり何が主体であるかは認識しておく必要がある。これに関連した典型的な問題は特に比較的新しい教授法に付随する教室での手法だけが断片的に紹介される場合である。例えば、経験の浅い現場の教師が Total Physical Response (TPR)に関する情報に初めて接したとしよう。先生が発する命令文に反応して立ったり座ったりする学習者の姿を思い浮かべ、さらに物珍しさも手伝ってかこれを自分の教室で使ってみようという人も中にはいるだろう。しかし TPR がレベルIIIのものであるということに気づかず、無理に他のレベルに当てはめ "TPR Method" や "TPR Approach" と解釈し、自分のコースを全てTPRで行うようなことをしまっただけではいざしまってしまうのは当然であろう。勿論これは TPR に限ったことでは無い。このように教授法や教授理論を取り入れようとするときは、どの段階について議論がなされているのか注意しなければならない。

4. 結論

本稿では海外、特に英語圏の言語教授法を日本語教育に取り入れる際に注意を払わなければならない点を、文献から情報を得るという観点から、特に、邦訳版を読む際に生ずる問題点と教授法のレベルの違いから生ずる問題点を中心

に論じてきた。文献から教授法を学ぼうとする場合、その文献が扱っている教授法のレベルを理解し、また翻訳の場合、原著についての情報や日本語に翻訳された背景を事前に知っておくことが大切である。さらに、本文ではあまりふれなかったが、文献が英語等特定の言語の教師を対象に書かれているのか、語学教師一般に書かれているかと言うことにも留意しておくべきである。最後に、本に書いてあることが全て正しいなどと決めつけず、自分の教えている日本語の教室にあてはまるかどうか批評しながら情報を収集してしていく位の余裕があるとよいと思う。

参考文献

1. Anthony, E. M. (1963) "Approach, Method and Technique" in English Language Teaching, 17:63-7
2. 石田 敏子 (1988) 『日本語教授法』東京, 大修館
3. Widdowson, H. (1978) Teaching Language as Communication, <東後 勝明他訳 (1991) 『コミュニケーションのための言語教育』東京, 大修館>
4. _____ (1983) "Teaching Language as and for Communication" in H. Widdowson. ed. Explorations in Applied Linguistics 2, Oxford: Oxford University Press, 1983, 215-228
5. Wilkins, D.A. (1976) Notional Syllabuses, <島岡 丘訳注 (1984) 『ノーショナルシラバス: 概念を中心とする外国語教授法』東京, 桐原書店>
6. 江副 隆秀 (1987) 『外国人に教える日本語文法入門』東京, 創拓社
7. Canale, M. and M. Swain. (1980) "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing" in Applied Linguistics, 1:1-47
8. Krashen, S.D. and T. D. Terrell. (1983) The Natural Approach, <藤森 和子訳 (1986) 『ナチュラルアプローチのすすめ』東京, 大修館>
9. Johnson, K. and K. Morrow, eds. (1981) Communication in the Classroom <小笠原 八重訳 (1984) 『コミュニケーションティブアプローチと英語教育』東京, 桐原書店>
10. Stevick, E. (1976) Memory, Meaning & Method, <石田 敏子訳 (1988) 『新しい外国語教育--サイレントウェイのすすめ』東京, ALC>

11. _____ . (1982) Teaching and Learning Languages, <梅田 巖他訳 (1986)『外国語の教え方』東京, サイマル出版>
12. 高見澤 孟 (1989) 『新しい外国語教授法と日本語教育』東京, ALC
13. 田中 望 (1988) 『日本語教育の方法』東京, 大修館
14. 名柄 迪 他 (1989) 『外国語教育理論の史的発展と日本語教育』東京, ALC
15. Hymes, Dell. (1967) "On Communicative Competence" cited in H.D. Brown (1987) Principles of Language Learning and Teaching
16. Bachman, L.F. (1989) "The Development and Use of Criterion-Referenced Tests of Language Ability in Language Program Evaluation" in K. Johnson, ed. (1989) The Second Language Curriculum, Cambridge: Cambridge University Press, 242-258
17. Larsen-Freeman, D. (1986) Techniques and Principles in Language Teaching, <山崎 真穂他訳 (1990)『外国語の教え方』東京, 玉川大学出版部>
18. Richards, Jack C., J. Platt and H. Weber, eds. (1985) Longman Dictionary of Applied Linguistics, <山崎 真穂他訳 (1988) 『ロングマン応用言語学用語辞典』東京, 南雲堂>
19. Richards, Jack C. and T. Rodgers. (1986) Approaches and Methods in Language Teaching, Cambridge: Cambridge University Press
20. Rivers, Wilga M. (1968) Teaching Foreign Language Skills, <天満 美智子訳 (1972)『外国語習得のスキル』東京, 研究社>